

『後拾遺集』 作者からみた特性 山之内 恵子

『後拾遺集』の特性の一端を考察することに当たり、入集歌人的側面からその問題を検討してみたいと思う。

『後拾遺集』の記名作者数は三二一名で、『古今集』一二〇名、

『後撰集』二一九名、『拾遺集』の一九六名と比較するとその作者数は非常に増加していることになる。その現象は、『仮名序』に述べられるように、『古今集』、『後撰集』の歌人を排除して広く梨壺の五人以後、当代に至る迄の歌人の歌を網羅し、当時の歌人を多く収め、尊卑卑目の弊に陥らぬように撰集したと述べられている。

そして入集した歌人も、本集が『拾遺集』成立以後、八〇年間もの長い空白期を経て編纂された為、その歌人達も一三〇年間という幅広い時期に渡っている。それだけに、『後拾遺集』の編纂に関して、どの時期の、どの歌人を多く採択したかという点は、『後拾遺集』の特色、歌風、ひいては文学性とも関与してくる重要な部分であるとも言えるのではなからうか。そこで、本稿では、かつて『勅撰作者部類』や諸本の勅物、『和歌色葉』、『袋草紙』、『二中歴』等の資料、記録類を使用し作成した拙稿「後拾遺和歌集作者ノート」(1)~(5)に拠って、各歌人の没年時、あるいは出家、生存年時を基準にして入集歌人の年代別分布表を作成した。その入集歌人の分

布状況から、いくつかの特性を考察することにしりたい。

付記 「後拾遺和歌集作者ノート」(1)~(5)は、『立正女子大学短期大学部研究紀要』十三集(昭44・4)、『文芸論叢』六号

(昭45・2)、『立正女子大学短期大学部研究紀要』十四集

(昭45・12)、『文芸論叢』七号(昭46・3)、『並木の里』

三号(昭45・9)にそれぞれ発表した。

△後拾遺集入集歌人年代別分布表▽

凡 例

- 1、『後拾遺集』の入集歌人を、没年あるいは資料等によって判明する生存、出家年時(該当する歌人には歌人名の横に○印を付して没年時判明歌人と分類した)をもとに、年代別に配列した。
- 2、歌人名は実名をもって記載し、表は年号、西暦、歌人名、入集歌数、年時別歌人数、歌数の順である。

なお、歌人の没年や生存年時に関する典拠資料等の詳細は『後拾遺和歌集作者ノート』を参照されたい。

- 3、生没年時未詳の歌人に關しては、男子、僧侶、女子、詠み入しらずの順に記して、それぞれの入集歌数、初出勅撰集名を付して表にした。

〔後拾遺集歌人年代別分布表〕 表1

年	号	歌人	名	歌人数	歌数
康和	二	96	元真7	1	1
天延	二	974	少将義孝7	2	1
貞元	二	977	兼通1、偷妻1	2	2
天元	三、五	980、982	望城1、高明10	3	11
永観元	一	983	順3	1	2
寛和	元	985、986	好忠9 斎宮女御7、為長1・規子内親王1・この頃	4	18
永延元	一	987、988	兼明親王1・為基1	2	2
正暦元	一	990、994	元輔26、兼家4、兼盛18・能宣26・為光1・通順1、道信11	7	87
長徳元	一、二、四	995、996、998	朝光2、統理1、道綱母7、円松1、小大君1 5・實子2、惠慶6・為頼2、実方13、相方1 定子2、東三条院1、有規1・この頃重之14	10	40
寛弘	一、八、四	1000、1001、1011	馬内侍12、花山院5、義樹1、善言4、具平 惟規3、兼院2、致時1 匡衡7、盛少将2、中宮内侍4、高遠6、紫式部4 兼澄7・為時3、経信母1	12	57
長和元	一、三	1012	三系天皇3、為義2、雅通1、弟少納言2・ 為政1・延子2、道济22・源賢2、道命16	4	18
長和四	一、五	1015、1016、1014	正言2、輔尹1、頼光1、井手尼1	5	25
寛仁元	一、四	1017、1018、1020、1016、1014	小式部内侍1、土御門御匠殿2、櫻寿1、公 信1、則成1、能通2、大輪輪1・行成1、 実繁1、道長5、為言1	9	51
治安元	一	1021	経信1、経任1、清仁1、運救1、和泉式部67 則長3、善超1、朝任1、教昭1、音成1 選子内親王7、為経1、為盛女1、斎院中将 1・道成1、保昌1、忠家母1	3	15
万寿二	一、四	1025、1027	補親13、前中宣出雲1、忠信母1	17	91
長元元	一、三、六	一〇二八、一〇三〇、一〇三三	公宣3、公任19、義忠1、頼言1、永成1、 赤染衛門32、為善8・公成1、深紫3、この 頃江侍従6	10	75
寛徳元	一、二	1044、1045	師信2、隆家2、後朱雀院3、為任1、親範 1、通房1、大和宣旨3、定頼15、	8	28
承永元	一、二、五	1046、1047、1051	加賀左衛門4、小一條院1、駿河1、能因	9	46

以上の入集歌人の年代別分布表を、勅撰集成立時期をめやすに『拾遺集』の成立したと思われる寛弘二年（一〇〇五）前期、それ以後から『後拾遺集』の奉勅の下令のあった承保二年（一〇七五）迄、それ以後と便宜的に三区区分した。

それぞれの区分の歌人数については、拾遺集前期が34名、14.5%、承保二年迄が143名、60.9%、それ以降61名、26.0%となっている。この数字からも明確な如く、いわゆる拾遺集以後の勅撰集空白期と思われる承保二年迄の期間にその比率が高くなっている。この現象は、撰者通俊が『後拾遺集』を編纂するに当たり、特にこの空白期を尊重した撰歌意識によるものであろう。また、当代歌人といわれる承保二年以後の歌人は、他の勅撰集と比較するとその比率も低く、それでも附表に記した八四人の没年未詳歌人のうち八二人迄が、『後拾遺集』初出やのみに入集された歌人であり、その歌人等を当代歌人として加えても44.8%となるにすぎないのである。さらに各区分中の歌人一人当たりの平均入集歌数を割り出してみると、5.6首、4.5首、2.7首となり、拾遺集以前の歌人に、その比率が高くなっている。

次に、二三五人を数える生没年判明歌人をそれぞれの時期ごとに、男性、僧侶、女性に類別すると、拾遺集前期は男性二五、僧侶二、女性七人で、次の勅撰集空白期は、八八、二四、三一人、以後では五一、三、七人となっている。

拾遺集前期の男性歌人では、能宣、元輔26、兼盛18、重之14、実方13、高明10、好忠9首と『拾遺集』の代表的歌人の入集が目立ち、また僧侶歌人の惠慶6首も『拾遺集』では18首が入集している。また、七名の女性歌人では、道綱母、斎宮女御7、小大君5首が入集されている。この三名の女性歌人は、道綱母が雑二の巻頭歌

904、斎宮女御は雑二の巻軸歌引、小大君は、周知の如く『後拾遺集』の巻頭歌に配された歌人でもある。この期の歌人達はいずれも『拾遺集』の代表歌人であり、撰者通後は、こうした伝統的な評価を与えられた歌人の採択につとめたといつてよからう。

区分した三期のうち一番入集歌人、歌数の多い拾遺集空白期では、道濟22、長能20、公任19、定頼15、輔親13、為善、頼宗、経衡8、匡衡、兼澄7首の男性歌人、31首もの歌を入集する能因、良暹14首と、王朝女流歌人の悼尾を飾る和泉式部67、赤染衛門32、相模40、伊勢27、小弁15首がいる。この時期は、『後拾遺集』歌風を形成する最も興味深い部分である。伝統的な歌のあり方を踏襲し、継承して行こうとする男性歌人に対して、能因や良暹といった僧侶歌人の、詠もうとする対象をじつと見つめ自然や季節を素材にまたは媒介として、個人の抒情を歌いあげようとする傾向が萌芽し、また歌本来の抒情を実生活の中で感受し、詠作する女流歌人といった構成は、そのまま『後拾遺集』の歌風を形成しているといつてもよい。

承保二年以後の時代では、範永14、白河天皇7、経信6、師賢、国房、孝善、通俊5、通宗4首の男性歌人に、素意法師7、康資王母9首等が代表される。この期の歌人達は白河朝の近侍者達であり、和歌六人党の築いた新しい詠風を継承してゆこうとする意識を感じさせるが、その詠風は六人党らのそれに較べて、いささか規模の小ささを感じさせる。

以上年代別分布表から各期歌人の詠作状況、及びその期を代表する歌人達について述べてきた。そこで、次に『後拾遺集』歌人を全体的に概観し、その歌人構成の特色について触れてみることにしたい。

『後拾遺集』の歌人構成は、和泉式部を筆頭に相模、赤染衛門、伊勢大輔らの多くの女流歌人を入集させ、その入集歌人達は後撰、拾遺時代にまで溯っているが、彼等を概観すると、能因、相模と和歌六人党（範永、棟仲、頼実、兼長、経衡、頼家）の後冷泉朝の歌人、そしてもう一方は経信、通俊等の後三條・白河朝の歌人である。これは、『後拾遺集』が編纂された時代が院政期という特異な時代であつて、貴族文化の衰退に新しい武士の文化が流れ込もうとしていた時期で、歌人構成にもこの点は大きく反映しているといえるだろう。この顕著なあらわれは、上流貴族階級の歌人化と、受領層歌人の成立に代表される。注目される和歌六人党の誕生は、その最も典型的なものである。受領層階級の身で、和歌が単なる趣味としてではなく、日常生活に密着した一つの心の安らぎとしての場として求められたものと考えられる。このような現象は『後拾遺集』の文学性の萌芽と符号している部分としても大いに注目されるところである。

そこで次に、『後拾遺集』歌人構成のいくつかの特色を掲げながら、その特性の一端を述べてみたい。

まず、第一に言い得る点は女流歌人の入集が多く見られることである。最多入集歌人の一位から三位、及び五位が女流歌人で占められていて、明らかに女流歌人への評価が高かったことを示している。このような現象は、他の勅撰集では全く見い出せない本集の歌人構成の特性を担う部分といえよう。そこで、本集入集の女流歌人のどのような点が重視され、評価されたのかを考察してみたいと思う。その試みとして、各部立内における女流歌人の入集歌分布状況を次の表に示してみると表3の如くなり、特に分布の目立つ部立は哀傷恋

二、雑一、恋四、雑二、雑三、雑四、雑五、雑六で、特に詠嘆性の強い部立内に多くの女流歌人を配していることが判明する。各部立内の三〇から五〇パーセントを占めるといった現象は大いに注目すべきであろう。特にその分布が雑部に高いという点は、『後拾遺集』で注目される古代詩から中世詩に至る転換期の様相を濃く示す巻だけに、女流歌人詠を雑部に多く分布させたことは興味深い。

では、その女流歌人の増大の意味するものとは何であろうか。本集に入集している女流歌人の多くは、受領層階級の子女等であり、その多くが宮仕えという場を持ち、主情的な生活意識の中で詠歌されることになる。情趣豊かで、しかも繊細な感覚で詠まれた歌を、撰者通俊は、古今集以来の歌本来の持つ抒情性という観点から再度見直そうとした編纂方針がとられたことは明らかに指摘される。

次に、後撰集時代の代表的歌人で『拾遺集』で多く採られた能宣(三位、59首)、元輔(四位、48首)、兼盛(五位、38首)、惠慶(十位、18首)、重之(十五位、13首)等が、『後拾遺集』でも六位(元輔、能宣、26首)、十二位(18首)、十六位(14首)、二一位(12首)と高く評価されている点は注目されることである。また拾遺集歌人の公任、長能もこれにもれず、彼らの後に続いていく。このように、当代歌人よりも、拾遺時代の歌人に重きを置いている点は、前勅撰集である『拾遺集』を通俊がかなり意識したものである。

しかし、このような保守的傾向の中で、能因(31首)、頼宗(18首)、範永、良暹(14首)なども評価し、採択している点には、革新的な意図が感じられる。後撰、拾遺集時代の歌人に比して極力少ない当代歌人をその入集歌数(三首以上)の多い順に掲げると、康

△各部立内における女流歌人歌の分布状況一覽▽ 表3

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	部立
哀傷	羈旅	別	賀	冬	秋下	秋上	夏	春下	春上	歌
35	6	4	8	9	9	24	16	7	34	女流歌人
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	数
68	36	39	36	48	42	100	70	37	127	総歌数
51.5	16.7	10.2	22.2	18.7	21.4	24.0	22.9	18.9	26.7	%
計	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
	雑六	雑五	雑四	雑三	雑二	雑一	恋四	恋三	恋二	恋一
368	17	21	18	21	38	31	27	14	20	9
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1218	59	61	58	70	68	71	62	55	51	60
30.2	28.8	34.4	31.0	30.0	55.9	43.7	43.6	25.5	39.2	15.0

資王母9首、白河院、素意、永源、兼澄7首、経信6首、国房、孝善、通俊、師賢5首、頭房、周防内侍、俊綱、成助、通宗、頼綱4

首、頭綱、右大臣北方、国基、源縁、後三條院、新左衛門、資綱、輔弘、長濟3首となっている。

最もその入集歌数の多くを採択された康資王母は、後拾遺集撰者通俊の伯母に当たり、側近の実力者歌人としても著名であり、また、7首入集の素意法師も通俊の母(家業妻、輔親七女)の親族である。この他、師賢、俊綱、通俊の兄の通宗、長濟は和歌史上画期的な歌人集団である和歌六人党と深い親交を持ち、その後を受けた歌人達である。また成助(賀茂)、国基はともに神主でありながら、通宗と共に後三條、白河朝の近臣者達と交友をもち、地方で寺社歌合を催すという新しい文学的な試みをなし、源縁もこの試みに参与した同人である。このように当代歌人の入集に関してはその歌を入手しやすい親族らを重視している点や、和歌六人党との交友のあった彼らを評価するなど、『後拾遺集』では極力少ない当代歌人の採択にも、身辺の歌人達を中心に、当時の和歌界においての詠作活動を行なった歌人集団の新しい表現、文学性に注目する編纂方針がとられたことを感じることができる。

次に、詠み人知らずの減少が掲げられる。この問題に関しては、拙稿「『後拾遺和歌集』詠み人知らず歌考」^(註2)に詳しく述べたのでそれに譲るが、『古今』『後撰』『拾遺』に比較してそれを極端に減少させたというのは、入集せしむる歌の本文、成立事情を正確に記すという、撰者の意欲的な姿勢のあらわれであるということができよう。

また、当時歌壇界の最有力者の経信の入集歌数が六首と少ない点や、入集された歌人中には年少者で歌歴もそれほど豊かと思われぬ歌人が見い出せることなど、和歌史上の転換期を迎え、しだいに

中世的歌界へと移行していく気運が生まれ始め、僧侶歌人の入集が増加する点など本集の特性を示唆するいくつか『後拾遺集』の歌人構成の特色として掲げられるのである。

以上のように、『後拾遺集』歌人についてその没年を基準にして年代別分布表を作成し、そこに顕われる特性を考察してみた。従来の仙洞歌壇や、撰闕家優勢の政教性の強い歌壇はしだいに分散され、そこを母胎とした群小グループによる和歌活動が盛んになった。そうした状況から生み出された『後拾遺集』は弱輩、通俊によって編纂されるに至った。『拾遺集』成立以後の長い空白期を内包したが由に、歌人構成にも数々の特色が生まれ『古今』『後撰』『拾遺』と一線を引き、いわゆる古代和歌からの脱皮を計ろうとする意欲的な気風をも感じ取ることができる。

そのような意味合いから考えると、撰者通俊は本集を編纂するに当たり、かなり慎重に入集させる歌人等を選んだと思われる。そこには、各歌人の時代的な反映が見られ、各々の個性の表出を重視し過去の勅撰集とは全く異なる新風を送り込もうとする通俊の積極的な編纂意識を感じることができるのである。

註1 上野理氏「後拾遺前後」(昭51・4)「後拾遺集の歌風」章で、歌人を政治的背景から四期に分類され、各期の三首以上入集の歌人を掲げておられるが、第三期に属する歌人と思われる四首入集の観覚が見当たらない。追補すべきであろう。

註2 『平安朝文学研究』(昭46・8)

第十回・文芸学会

昭和五十一年度の第十回・文芸学会は、多数の参加者により十一月二十七日に開催され、静かな晩秋をその熱気の中に包み込み幕を閉じた。

今回運営委員会が試みた幾つかの新企画で最も規模が大きかったのは、先生方・卒業生・在校生による懇親会であると思われる。時間の都合により、自己紹介程度のお茶会に終わってしまったのが残念ではあるが、予想を上回る多数の卒業生の参加に、これを契機として文芸科のつながりを深め文芸学会をますます盛り上げていくことの大切さを切実に感じた。

発表者に関しては、各人内容をすつきりとまとめ上げた充実した発表を行なっており、落ち着いてしかも熱っぽい発表態度に会場は静寂に包まれた。そして、このような聴く側と発表者との一体化の内に、質疑応答も活発に行なわれていた。

また、舟崎克彦氏の御講演が、ユニークかつ非常にユーモラスなものであり、淡々

と語られた「フアンタジイの発想」はわれわれに改めて児童文学の存在を見直させ、卒業生からも盛んに質問が飛んでいた。

なお、この席上で第一回文芸科賞の入選作が発表されるはずであったが、松隈主任教授から、応募作品が少なかったことから残念ながら入選作はなしとのご説明があった。来年度に期待が寄せられる。

以上のような今年度文芸学会に対するアンケートを後日とったが、成果は上らず、表面的には洗練された文芸学会であり成功を修めたかに見えたが、学生一人一人の自覚のなさを痛感した。しかし伝統の文芸学会―来年の一層の盛会を期待したい。

(林 智子)

文教大学女子短大文芸学会プログラム

昭和五十一年十一月二十七日

総合司会 仁平 信子

開会の辞

本学教授 松隈義勇氏

△研究発表▽

司会 仁平 信子

一、八王子千人同心 松本斗機蔵伝

広沢 友子

二、言語遊戯の魅力

——山村暮鳥の「聖三稜玻璃」——

平井 敬子

三、三島由紀夫

——「仮面の告白」の世界——

林 智子

四、「更級日記」について

——共同レポート「蔡光祭を終えて」——

上野 正子

五、テープ編集

——テープ編集——

笹本 秀子

六、宮本百合子

——「伸子」について——

中村 紀子

△講演▽

司会 林 智子

「フアンタジイの発想」 舟崎克彦氏

閉会の辞

本学教授 伊藤康圓氏